

モーツァルトとバッハ

大村 恵美子

来たる7月3日に、はじめての企画として、バッハに関する気軽な感じのパネルトークを予定しています。どんなことになるのか今から楽しみです。こんな場合に考えられるのは、バッハがどんなにすばらしいか、という賞賛をいたずらに競うことにならないかという恐れです。そのために、私は<バッハと私>という観点からお話しただけなら、という要望をお伝えして、なるべく主体的なバッハ受容の体験を、それぞれの方に語っていただくように希望しているのです。

ここに、有効な手段がひとつ考えられます。それは、あるひとつのものを評価するのに、もうひとつ他の、できれば対照的なものを並べて、その両者がどう違うか、ということを検討することによって、それぞれの特性を浮き彫りにさせてゆくというやり方です。

その好例がバッハとモーツァルトの対比で、私自身これまでに出会ってきた多くの音楽論争でも、結論的な段階でここに論点が絞られてくるのが、じつにしばしばありました。初対面の一般音楽愛好家の気軽な反応としても、「バッハ専門の合唱団ですか。私は何といても心にピッタリくるのはモーツァルトですよ」という、バッハには崇敬、モーツァルトには熱愛、のパターンが、たいへん多いのです。さては大学者たちの間でも、バッハかモーツァルトか、は絶えざる討論のタネとなっています。また「有識者」方の場合には、あの20世紀に高くそびえたつ大神学者カール・バルトが、モーツァルトのほうに好ましい軍配をあげたかのような比較論を、お墨付きのように引用して、「バルトだってこう言っているじゃないですか」と、バッハへの無理解を弁護しようとしています。

私も、日本キリスト教団発行の雑誌『礼拝と音楽』

が創刊後間もなかったころ、臨時に編集の一員に加えられて、毎月原稿を集めるのに苦勞して、若気の至りでみずからバッハ・モーツァルト論を書いたことがあります。そのときの論旨と、現在の立場とは、大筋で変わっていないと思っていますが、あまりにも遠い昔のことなので、読み返してみる気もありません。ただ、そんな昔(1950年代)から、日本でも、一音楽学生の周辺でも、この問題が気にかかるヴィヴィッドなものと感じられていた、ということは言えるでしょう。

そういう、人の関心を引きつける比較論を、最近出た(2000年4月10日)礒山雅氏『モーツァルト＝二つの顔』(講談社)でも、最終の第9章<モーツァルトとバッハ>で著者は展開しておられ、最新の学術的成果をとり入れながら、両者の音楽が、ひじょうに異なっていて補い合う関係にある、と感想を述べておられます。

たいへんみごとな著作で、皆様にもぜひご一読をおすすめしたいと思います。私自身、バッハが上でモーツァルトが下あるいはその逆、というような判定をくだす気はなく、どちらも大好きなのですが、個人的な好みということではなく、音楽の内容から感じられるものを端的に表しますと、バッハにとって、人生とはゆるぎのない、いくら悪や悲惨の多いものであっても根底から肯定されたもの、という大きな喜びとして表現されるものであるのに対して、モーツァルトにとっては、人生とは大いに多彩で変化のある、それだからこそ愛着してやまない、刺激的なものとして表現されるのです。どんなつまらぬことだって、だから人間は愛すべきだ、という表われなのです。しかもそれが、死によって断ちきられてしまうことの怖れ、そこから、彼の哀惜、憂愁、断罪への戦慄にすらおよんで、特に晩年の作品を色

どっているのです。

磯山氏は、結論的な部分で、「霊的なモーツァルト、飛翔するモーツァルト。しかしこうした印象が幼児的な本能からではなく、高度に知的な仕掛けから生じていることを、本書では考察してきた。その意味でモーツァルトは霊的な飛翔さえく演じてしまうのである」といって、モーツァルトの本質的なものとして演技性を重視しておられます。磯山氏は、モーツァルトの愛の賛歌を、いくつもの作品のなかに読みとって、真の愛を知る女性へと開かれてゆく、そういう変化する女性をモーツァルトは重んじていると説かれています。《コシ・ファン・トゥッテ》のフィオルディリージ、《ドン・ジョヴァンニ》のエルヴィーラ、《フィガロ》の伯爵夫人、《魔笛》のパミーナ、等々。

しかし、私は、本来オペラがあまり好きでないこともあるのですが、マクロ的な意味で、いくらそれらが人生の機微、愛（エロース）の真実をとらえていようと、その大前提が、私には納得できないので

す。オペラのなかでは、よく人為的なテストが試みられます。こちらがだましても、その心のまことは動じないでいられるか、おとりをかけても、あばかれないか、さらには、賢人の仕組んだ火や水の試練に耐えきれるか、等々。それが私には、人間の尊厳を損なう行為とうつるのです。人の仕掛けるふり分けならば、なるべく避けて通るのが、私の人生です。したがって、人間の判定する勲章、褒賞に類するものも、あさましさを釣る不純なものと感じられます。こういう私ですから、いくらその演技が真実だからといって、変哲もないバッハの人生の重みと比べるわけにはゆかないのです。刺激的な早死にをむしろよしとするような人生と、真っ向から立ち向かう（しかしそれが必ずしも即ヤボではない）、息の長い人生と、どちらが性に合うのか……、こんなところから、バッハの話をしていただいても、けっこうおもしろいのではないかと考えた次第です。

第 87 回定期演奏会〈2000 年によみがえるバッハ〉(2000 年 5 月 14 日、石橋メモリアルホール) 来場者アンケートから

合唱について

合唱団の目を見張る実力向上に、ほんとうに感激／コーラスってすてき、今夜も明日も元気になる／初めてでしたが、とてもすばらしく、おごそかで敬虔な気持ちになりました／Geistlich！／バッハらしさが染み込んでいる演奏でした／コーラルでは、BWV156 の“生くるも 死ぬるも”が特によい。

アンサンブルについて

楽器と声の調和が美しかった／合唱と、オルガン、オーケストラの音のバランスもよく、美しく、心持よくきかせていただきました。

各曲について

ミサ曲を聞くことができうれしかった／アンコールのオルガンと合唱がとてもよかった／BWV56 のソロ・カンタータに感激した／これからもカンタータをずっと演奏していただきたい。

訳詞・解説

解説がよい勉強になり理解を助けてました／今回ほど日本語とバッハの音楽との融合を美しいと感じたことはありませんでした。これも大村先生のご指導と名訳の賜物です。

インターネットでもお祝い

U.S.A.

エドワード・トリングルバック

私は長いあいだ、インターネットで東京バッハ合唱団に出会えないものかと、探していましたが、それが見つかり、世界中であなた方を認めることができるようになったのを、とてもうれしく思います。あなた方のバックグラウンドはすばらしく印象深いもので、私はその友人のひとりであることを誇りに思います。

私たち家族全員であなた方の、5 月 14 日のコンサートの大成功を、お祝い申し上げます。

野尻湖、夏の合宿とコンサート

今年もまた、恒例の野尻湖での合宿と湖畔の演奏会の季節がやってきました。

東京バッハ合唱団は、8月3日(木)から6日(日)、長野県・野尻湖レイクサイドホテルで、3泊4日の合宿をおこない、5日(土)の午後7時に、対岸の神山教会で特別演奏会を開きます。この合宿には、後援会員をはじめどなたでも参加できます。参加または演奏会当日のみの宿泊をご希望の方は、あらかじめ合唱団事務局にお申し出くだされば、詳細をご案内します。

(宿泊先および神山教会のもより駅は、JR信越本線の「黒姫」駅または「妙高高原」駅です)

バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.4

5月14日、第87回定期演奏会場で、「カンタータ50曲選」第1期の10冊が発売開始となりました。すでに、学校、教会、個人、研究グループ、それぞれに北は岩手から南は沖縄まで、またニューヨークからも、広範の地域からお申し込みがあり、たいへん順調な売れ行きです。

合唱団出版局のほか、販売特約店として、アカデミア・ミュージック株式会社(〒113-0033 東京都文京区本郷3-10-5 電話 03-3813-6751 代FAX03-3816-4634)の強力な販売促進が、全国的に展開されることになりました。実物が皆様の目にふれる機会も多くなるはずですよ。

野尻湖・神山教会特別演奏会

2000年8月5日(土)19:00開演

プログラム

1. 合唱 カンタータ 106 番《神の時は いとも正し》(BWV106) 全曲
2. ヴァイオリン独奏 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第1番 (BWV1001) より
アダージョとフーガ

3. 合唱 小ミサ曲ト長調 (BWV236) より

キリエ (主よ あわれみたまえ)
グローリア (いと高きところに栄光 神にあれ)
ドミネ・デウス (主なる神 神の小羊)
クム・サンクトゥス (聖霊とともに)

演奏者

ヴァイオリン=小田幸子
ピアノ=内山亜紀
合唱=東京バッハ合唱団
指揮=大村恵美子

入場無料

お申込み/お問合せ先: 東京バッハ合唱団 〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732 E-mail: bachchor.tokyo@aol.com

カントル・バッハ―連載 18 (最終回)

第 6 章<音楽の献げもの>

ポール・デュ・ブシェ
訳：大村恵美子

<主よ、いま御身の御座にわれ進みいで>

バッハは、生涯の最後の数か月を、完全な失明のうちにすごしました。2度の手術と有害な薬の処方のおかげですっかり体を弱めた彼は、苦しみました。それでも作曲はやめません。娘婿アルトニコルと、新しい弟子の J. ゴットフリート・ムーテルがそばに付き添って、筆記したり筆写したりしました。とりわけ、彼らはバッハと一緒に<オルガンのための 18 のコラール>を見直しました。

7月中旬ごろ、バッハはアルトニコルに、すばらしいコラール<主よ、いま御身の御座にわれ進みいで>を書き取らせました。彼はしだいに力強さを失っていきます。そして 18 日、感動きわまりないことに、彼は突然、視力をとりもどしたのです。でもその数時間後には、激しい熱をとともう卒中発作の危機に見舞われました。これが最期となるのです。22 日、彼は聖体拝領を受け、6 日後の 7 月 28 日火曜日の夕べ 8 時半に息を引き取りました。

アンナ・マグダレーナ、孤独

尊厳のうちに成就されたこのバッハの死が、尊厳

をもって区切られたものと、誰もが思いたいものです。でも、そうはゆきませんでした。バッハへの讃辞を送るひまも惜しんで、ライプツィヒの市参事会は、ハラーをカントルの地位に任命しました。そして、学校は「カントルを必要としているのであって、聖歌隊長は必要ない」ことを、辛辣に注意させたのです。

バッハが死んで、アンナ・マグダレーナはたいへんな経済的困窮におちいりました。彼女は「未亡人のみじめな状態」を訴えながら、夫の給料の 6 か月分を支払ってくれるようにと願い出ましたが、市参事会はこう答えます。バッハがこの地位についた 28 年前、やっと 2 月から仕事を始めたにもかかわらず、彼は 1 学年全体分の給料を受けとっている。したがって、未亡人になってからの分は、21 ターラー 21 グロシェンさし引かれることとなります、と。

遺産は配分され―音楽関係の本と作品手稿は、フリーデマンとエマーヌエルのあいだで再分配されました―、アンナ・マグダレーナは、以前に自分に支給されていた 3 分の 1 の額で、未婚の義理の娘カタリーナ・ドロテアと、2 人の娘、カロリーナとズザンナの養育を確保しながら生活しました。暮らしていくために、彼女は売れるものならなんでも一特にセバスティアンの残した楽譜でも一売らなければならなかったのです。市参事会は、「彼女の貧困状況を考慮して」<フーガの技法>を 40 ターラーで買い上げました。1760 年、まったく悲惨な状態のうちに、彼女は死にました。

- 完 -